

Views from Orienteering

村越 真

明治の地図で走ってみると・・

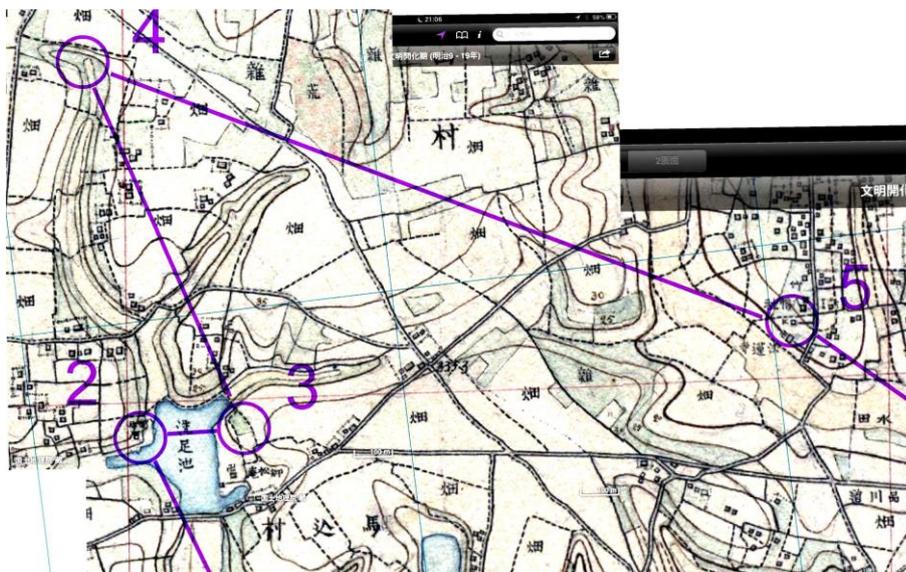
昨秋、「東京時層地図」という Ipad のアプリが出た。東京の明治初期から現代までの7時点での地図を、対照させながら見ることでできるアプリだ。もちろん、Ipad のアプリなので、ただ眺めるだけではない様々な工夫がある。一方の地図を動かすと、他方も連動して動く。一方を拡大、縮小すれば、他方もそれに合わせて大きさが変わる。渋谷の NHK の裏にある谷間は、小学唱歌「春の小川」の着想が得られた場所として有名だが、このアプリで明治初期を見ると、埼玉の里山かと思うような景観が広がっている。ソフトを購入した日は、日がな眺めて飽きなかった。

遊んでいるうちに閃いた。この古地図を使って東京郊外でオリエンテーリングをしたらさぞかし面白かろう。建物、道路は、その多くが現存しない。旧街道も役立つかもしれないが、方向や距離を維持しながら使わないとロストの危険がある獣道のようなものだ。一方で、地形の大規模改変は少ないので、結構頼れるかもしれない。裏を返せば、等高線や地形を使ったナビゲーションの実践や練習が都市部でもできるはずだ。

2月22日、「城南地形萌えラン」と称して、実践してみた。場所は大学院生時代に住んだ大森の山の手、馬込と呼ばれるこのエリアだ。別名、九十九(つくも)谷とも呼ばれている、武蔵野台地が開析されてきた複雑な尾根・谷と台地上の微地形が特徴的だ。これがナビゲーションに役立つはずだ。

出発点を池上に選んだ。馬込台地が南東から北西に延びる斜面緑地を形作る。それに沿って走り、洗足池に続く沢にうまく入ればいいだけだ。ビルや建物には覆われているが、注意を凝らすと、道を交差する時に側方の斜面の片鱗が見える。台地があるのが分かる。スタートしてみるまでは、本当に地形が分かって、それでナビゲーションできるかとドキドキ。なんだか初めて北欧に遠征した時みたい。

参加者にも交代でナビゲーションしてもらった。洗足池から北方に延びる谷を詰めるのが安全ルートだよな、と思っていると、先導する参加者が地形も無視して直進して台地が上がって



今回オリエンテーリングに使った明治初期の地図。4→5の間は不明瞭な地形だらけだ。植生も道も頼りにならなかったら、微かな地形の片鱗に頼るしかない。いけるかどうかぎりぎりの緊張感は、北欧のオリエンテーリングを彷彿とさせる。

いく。時折交差する左側の道を見ると、明らかにそこに谷があるのを感じられる。心眼でそれを感じながらも、それを無視したルートを取る快感！なんだか世界のトップ選手のルート取りを体験しているみたい。

時には、現在の道も利用できる。清水窪と呼ばれる北千束の谷間から荏原町の北側にある旗岡八幡宮を目指した時だ。この区間は特徴の少ない台地を横切る。しかも旗岡八幡宮も台地上の緩やかな谷の北縁にあるなだらかな尾根上にある。いずれもナビゲーションが難しい場所だ。まずは、比較的主要道らしい地図上の道をたどることを考えた。いずれにしるこの方向にいけば、洗足池から北東に向かって延びる細長い谷に出る。そこをチェックポイントにして、荏原の谷に慎重に入り、台地の下縁の傾斜変換をガイドラインにしながらその方向が南東から東に変わるところを捉えて、台地にあがるというプランを立てた。大自然の中のオリエンテーリングそのものだ。

清水窪から出ると、環七通りが走っていた。その方向を読み取ると、地図上の主要道に沿っている可能性が高い。環七を歩測で距離を維持しながら進む。途中、右側の谷頭(こくとう)を確認できたらラッキーと思っていたが、実

際に歩道の右脇の区画が5mほど低く、道路と直角方向に沢状に延びている谷頭が確認できた。そこから少し方向を南に振って約500m。ここも、歩測をしてみると、ずばり500mが近づくところで、中原街道が左右に延びる谷の中を通っているのが確認できた。

本格的なナビゲーションの練習として十分通用する。都市の仮面の下に隠された地形に対する感受性を高め、土地の歴史を偲ぶのにもいいプログラムだ。参加者からも「地図1枚あるだけで、土地に対する見方が変わる」という感想が寄せられた。それまでただの坂道だった場所は、構造としての地形に意味を変える。私自身、いつの間にか、建物の蔭で見えない地形を頭の中で常にイメージし、イメージ化された地形の中で走っているような気分になった。

4月13日には、「かるがもとーさん」という通称名をお持ちの世田谷在住のオリエンティアがやはり昭和初期の地図でロゲイニングを実施した。この遊びはくせになりそう。



参加者に地図を配り、スタート前のブリーフィングをする。みんな不安と疑惑の目を向けている。そりゃそうだ。こんな「でたらめ」な地図で目的地にいけるのだろうか



少し走ってみるとこの通り、「そうそう左側がこの急斜面」。意外と分かるものだと、笑みがこぼれる。

トレランへの規制条例

3月上旬、鎌倉市がトレイルランニングの規制条例制定を決議した。陳情に基づくもので、本会議で賛成多数で議決された。この決議は条例案の作成を決議するもので、条例自体ができた訳ではない。しかし、約10年近くトレイルランニングにも関わり、自然環境や他の活動者とのコンフリクトの虚実を研究し、問題点をフィールドでの先輩的な立ち場にあるオリエンテーリングの視点から指摘した立場からすると残念な思いがしてならない。

残念だと思う第一の理由は、トレイルランニングによる山道の利用が規制される事態が指摘されていたにもかかわらず、内部努力が実らなかった点だ。条例制定が決議された鎌倉市は、これまでにもイベントに対する中止要請によってイベントが中止された経緯を持つ。他にも、主として自然環境の保護という立場からイベントが中止されたケースが存在する。トラブルシューティングがうまく機能せず、条例といういわば強制的な方法で調整が図られる事態に至ってしまったのだ。昨年京都 OLC の中止問題や前年のインカレロ

ングの不成立を考えると、オリエンテーリングにとっても対岸の火事とは思えない。

これまでも、MTBがトレイルから閉め出されたこともあったし、ロッククライミングでも一部の地域では地元と活動者のコンフリクトが存在する。オリエンテーリングでも「高度成長期」には、「公害」呼ばわれ、開催が迷惑がられた時代もあった。私たち JOA も、それを踏まえて、この4年間「森を走ろう」シンポジウムを開催し、こうした問題とそれに対する対応を議論、啓発してきただけに、トレイルランニングが同じ轍を踏んでしまったのが、第二に残念な点だ。

トレランの規制は、自業自得といえどもそれまでもかもしれないが、市民スポーツの健全な発展という点から見れば、それ以上の現代スポーツの課題をあげ出ししている。鎌倉の条例制定でも、共産党議員団は反対の立場を取ったという。それは一つの見識である。

第一の課題は、メーカーやマスメディア主導による発展の負の側面だ。私自身、こうしたムーブメントに携わっている。その賑わいの1/10でもオリエンテーリングが恩恵にあずかりたいという下心もある。しかし、発展の背後にあるメーカーの関わりはよい面だけでは限らない。メーカーの存在理由は利潤を得ることである。となれば、より多くの参加者を得るために努力するのは当然のことだが、一方で、メーカー主導のスポーツイベントでは、参加者が「お客様」になりやすい。参加者を専用の競技場でもてなすことのできる一般的なスポーツであれば、それでもよいだろう。だが、オリエンテーリングやトレランのようなスポーツでは、スポーツの論理よりも社会常識が優先され、また参加者は時にはそのスポーツの代表者として見なされることもある。

この時「お客様」扱いされた参加者が、スポーツに対するポジティブな印象を心がけて振る舞ってくれるというという保証がない。指摘されるトレイルランナーのバッドマナーはごく一部なのかもしれない。だが、それらの事例を聞くにつけ、公共空間を「お借りして」スポーツをしているという意識の希薄さを感じざるを得ない。

第二の課題は、今の日本の社会が、異なる立場と主張を持つ人が、自発的に相互に利害を調整しようという市民社会の理想からはほど遠い状況にある点だ。国際学力調査で有名 PISA の背後

には、今後のグローバルな人材が身につけるべきスキルの精緻な定義があり、その中には異質な人々や集団との交流し、その中での対立を解決するスキルを発揮する、という項目がある。でも、現実には大人がそのスキルを十分に獲得しているとは言えないようだ。

私に関わる富士山一周トレイルランニングレースでも、自然保護活動者との間での強いコンフリクトがある。私たちと彼らでは立場が違うし、重要だと考える価値観が異なるので、意見も主張も異なるのは当然だ。だが、両者とも社会の中で活動しようとしている以上(私たちは当然だが、自然保護も、土地所有者の思惑や地域経済という社会的象とは無縁ではない)、自分たちの主張が100%通る訳ではない。どこかに妥協点を見つけ出して行かなければならない。だが、議論が十分かみ合っているとは言えない。

残念ながら、行政もポリティカルな立場から調整的機能を十分に果たしている訳ではない。他者の土地というコンフリクトが起こりやすい空間で活動するオリエンテーリングにとっても、これは超えるべき大きなハードルである。

黎明期を除けば、オリエンテーリングでは、今のところこうした問題は大事にはなっていない。それはひょっとすると現在のオリエンテーリングが「一見さんお断り」のかなりクローズドな世界だからなのかもしれない。普及発展のコストとベネフィット、トレランの問題はそれを思い知らせてくれた。

(村越 真)